

静かなる奔流

井本元義



その一 山の日記
その二 地の微熱

一

冬も終わりに近い頃、闇から吹いてくる生暖かい風に突然全身を包まれ、ふと立ち止まり、通り抜けた風を名残惜しうに振り返ることがある。春の喜びを期待する胸のときめきではない。風は忘れてしまった遠い昔の懐かしさを呼び起す。むしろ悲しみに満ちていると言つてもいい。具体的な事は忘れてしまつていても、その時々感覚はすぐに蘇る。深い泉に沈んでいる失つたものが泡のように浮かび出る。

夏の午後、突然の雷雨の直前に、いきなりおぞましいといふか言いようのない風が吹き込んでくることがある。凶暴な力を得た如く、人は溜まつていた怒りを一気に爆発させようとするが、激しい雷雨がそれを霧散させる。記憶にある怒りを思い出すだけの虚脱した体に雨音が響く。

弱い朝の太陽が次第に熱を帯びてくる日中、舁から棧橋に荷物を揚げた疲労の後の、日蔭の昼寝の肉体に吹いてくる潮風は何ものにも替えがたい。張りつめた筋肉と満ち足りた胃袋を愛撫する風をさらに引き立たせるのは、懐かしい自分の汗の匂いだ。この快感を味わつたことのある身体は、次のいかなる重労働にも耐える。

淫靡な時間に身を沈め、灰汁と恥辱を捨てて、悪臭に立ち

尽くす裏町を吹き抜ける一陣の風。安香水の匂いを吹き消してくれる、心地よい風にふと我に帰る。蒸発する汗の新鮮さは、規則正しい日常への回帰の一步だ。深い倦怠感からも己の肉体は何時でも必ず再生する。

その夏、僕は高熱にうなされ、悪寒に苛まれて一週間で狭い部屋で過ごした。水とわずかの食物しか喉を通らなかつた。体のだるさをむしろ体臭が安らげてくれた。意識を失つていき、元に戻らないまま深淵に吸い込まれていくのだという怖れも感じ始めていた。僕は朦朧とした意識の中で、自分の胸板や腹や性器と睾丸を撫でた。ねっとりとした触覚だったが、確かにそこには肉体があつた。痛みは感じられなかつたが、いたるところがだるかつた。僕を苦痛で苦しめるのは狂つた肉体ではあるけれど、それとは関係なしに何も感じない塊が別に存在している不思議な感覚だつた。冷静であるつもりだつた。しかし咽喉か胸のどこかをナイフで切り取れば、すつきりするような気がして苛立つていた。

ある朝目覚めると、熱もだるさも悪寒も消えていた。力は漲つていなくなつたが、身体が生きている新鮮な感覚があつた。酸っぱい体臭も心地よかつた。僕は布団を跳ね上げた。小さな窓から風が光つてリズミカルに吹き込んだ。汗に濡れた全身を、爽やかな風が撫でて通り過ぎて行つた。僕は自分自身の肉体が、一個の物体そのものであるということに初めて感じた。風のおかげだつたのだろう。

こうやって僕は二十歳を迎えた。

進路のことで父と諍いがあつて、家を出て二年経つていた。家に戻ろうという気持ちはなかつた。何の気なしに世話になつた山奥の飯場での数か月が、僕に自信をつけてくれたのは確かだ。そこに隠れたのではなかつた。居心地がよかつたのだ。自信ではなく居直つたのだ。

最初の頃は、同級生たちが大学へ通いやがて社会人になつて、輝かしい人生を送るのを想像して焦らないこともなかつたが、時間とともにそれは消えて行つた。僕はふてぶてしさを覚えた。またその道へ戻ろうと思えばいつでもできるという言訳を用意もしていた。

生きていくことは簡単だ。そして存在しなくなることも、誰にも知られずに消えて行くことも簡単だ。山の飯場で働く人たちは、いつの間にか現れそして消えた。記憶に残つていてもその存在は定かではない。誰が死んだか生きているかお互いに誰も知らず関心もない。勿論、僕の存在はもうだれも覚えてはいないだろう。

その自信は、それを自信というならば、一つの解放感だつた。それで僕は山を下りることにしたのだつた。

自宅のある市内の西方には嫌悪感が残つていた。それでありなじみのない東区を歩いてみた。少しは金もあるので余裕があつた。山の次は海だと思つた。築港があつて巨大貨物船が次々に寄港しているのは知つていた。仕事はいくらでもあるはずだつた。

初夏とはいえずでに酷暑は始まつていた。大通りの照り返しは強く、疾走する車は鋭い光をまき散らした。熔けたアスファルトがガソリンと混ざつて匂つた。方向は分かつていても海の気配は遠かつた。築港の岸壁が海の匂いを消していた。道路より一段下がつた横道を見つけてそこを降りて行つたのは僕の勘だつた。

古いモルタルつくりの二階建てが密集したあたりは、薄暗く湿気と生くさい臭いに満ちていた。そして静まり返つていく。「人夫さん募集」のベニヤ板が打ち付けられた事務所らしきもののガラス戸を慣れた手つきで開けた。

中は思ひのほか広く、四台のベンチが向かい合つて並べられていた。一つに三人の老人が詰めあつて座つてゐる。カウソターの奥の一見人を見下したような黒い顔の男がこちらを見た。奥には一台だけ扇風機が廻つてゐる。その風を受けようと老人たちが寄り添つてゐる。彼らは簡単な仕事を待つてゐるのだろう。男は思ひのほか親切で、仕事を探してゐるといふ僕にいろいろ説明をした。

「今までも何人か若者が来たが、大抵は音をあげて帰つたよ、世間が嫌になつて転がり込んですむほど甘くはないよ。きつい仕事が多いよ。仕事はその日に選べばいいが、無い日もあるよ」

僕は短い受け答えをし、書類にてたらのめの住所と名前を書いた。

「長く続けるなら寮もあるが、どうするね。ベッドが一つだけ空いている。朝晩食と手数料を引いてこれだけになる」

彼が書いた数字は思ひのほか低かつたが金額に執着はなかつた。それからこの生活が始まつたのだつた。

僕は様々な肉体労働を経験した。どれも過酷なものだつた。皮膚が擦り剥けても再生する暇は無かつた。痛みの蓄積は、次の痛みを受け付けない力になつた。僕はそれらに熱中した。自分の肉体を痛めつけることが快感であるかのようにだつた。

雑念を払うことが出来たが、正直なところ心の奥底に襲にはまだ引つかかつて取れないものがあつた。怒りと憎しみしかない父と愚かな母への軽蔑の念は消えなかつたものの、妙な懐かしさもあつた。それが僕には苛立たしかつた。忘れてしまふことだ。悲しみ淋しさこそないものの、まだ憎しみや愚かさを抱えているのは自分の弱さだ。残るのは一枚の薄っぺらな記憶だけだ。そんな雑念が起こつて来る日、僕は自分でも驚くくらいに働いた。怒りを己自身にぶつけるようだつた。疲労は心地よかつた。

最初は沖仲仕の荷揚げの仕事だつた。それを専門にする人の動きは、服装も無駄がなく軽快だつた。一人の老人が、古くなつた一式をくれた。疲労困憊した日々も慣れてくると通常の仕事になつた。何を運んでゐるかを知ることが必要なことだつた。

ある日の荷揚げは思い出にも残つた。珈琲豆の麻袋はそれほど重たくもなく、肩にしつくりなじんで運びやすかつた。擦り傷に珈琲の香りは浸み込み、関節の痛みをその香りが清水のように潤した。灼熱の太陽さえ琥珀のまろやかな光に潤

んでいた。その夜は、疲労の後の気たるさをゆつくりと味わって満足だった。

ある時、自分の裸体が光るように盛り上がっているのに気付いて、僕は思わず感嘆の声を上げた。

建築現場の材料運びは楽しくもなかった。仮設の階段を登る時に、資材が狭い壁に何度も当たった。その都度よろける、現場の工事人や大工が笑う。三階四階へ運ぶ呼吸には、埃の空気があまりに重い。だがある日の昼食の後横になったが、目覚めると昼休みは終わっていた。誰も僕を起こさず、若いから疲れたか、と監督が言ってくれた時は、親切心を感じたが屈辱も同じだった。

ビルの解体と残骸整理、道路工事の岩石の除去、どれでも受け入れる事には慣れていった。ただこの二年間で労働の形態が変わって行ったようだ。棧橋ではコンテナとフォークリフトが主役になり、建築現場ではリフトがいとも簡単に資材を空高く吊り上げるようになった。仕事が減ってきたのはその頃からだった。

ある時、貨物船内で積み荷の材木が雪崩を打って落ち、下敷きになった人夫が死んだことがあった。胴体が平たくなり手足が逆に曲がっていた。捨てられた折り紙の人形に見えた。頭は割れず血も流れていなかった。死体を見たのは初めてだった。僕は冷静になろうと自分の気持ちを抑えた。同じ寮の人間だった。普段はあまりもの言わず静かだったが、シニカルな薄ら笑いを絶やさぬ男だった。別に哀しみはなかった。乱れた頭髪から覗く顔は蒼白で眠っているようだった。

それは砕けた材木の一部でもあった。僕は動悸を抑えて、これが人間の死だ、こうやって人間は死ぬのだ、と自分に言い聞かせた。これは肉体よりも今はもう一個の物体なのだ、慣れるまでよく見ておくのだと。

死体の引き取りには誰も来なかった。

おどろおどろしい話も忘れることができない。郊外にある米軍基地の割のいい仕事に三人が勇んで出かけたが、帰って来ると食事もとらずに寝てしまった。

ヴェトナム戦争で死んだ米軍兵士、主に将校の遺体の修復作業の手伝いだった。上級のしかも白人の将校の死体に、形のはつきりしない他の死体から切り出した部位を縫い合わせて棺桶に収める仕事だった。家族に届けるためだった。なるべく多くの死体を修復するつもりだったが、黒人は後にまわされる。日雇い人夫はその臓器を拾い集めて消却炉へ運ぶことだった。匂いだけではないその作業の辛さは、せめてもの尊厳を守るということでそれらの臓器を手作業で行わねばならないことだった。

肉体の辛さよりも意味の薄い仕事ほど苦痛なものはない。ある時僕ともう一人に任せられた仕事には苛立った。古い三階建てのアパートの階段や踊り場の壁を塗り直すことだった。階段は三か所にあり建物は三棟あった。中古のコンプレッサーと噴霧器は壊れ、手作業で仕事を続けなければならなかった。その都度足場を組み替え、埃を払い何度も同じことを繰り返す。水色の塗料を塗り付けたとてたいして美しくもない。刷毛を持つ手首が疲れる。そして悲しさを呼び起すようなシ

ンナーの匂い。一日で仕上げなければならぬ仕事でせつなかつた。

時とともに沖仲仕の仕事は減り、僕は見様身真似で覚えたフオークリフトの作業をするようになり、ほかの仲間より一目置かれるようになった。年上も僕をさん付けで呼んだ。また背が伸び体にも自信がついた。

酒を覚え時々泥酔した。また猥雑な界限に足を運ぶようになった。充足されるだけでよく、定期的な習慣になった。そのため金は残らなかつた。女性を見るのにも昔のような恥じらいは無くなつた。

事務所の搾取がひどいと言いつつ同僚もいたが僕は気にしなかつた。会社の付属のような派手な身なりのヤクザらしきものが、時折り僕に話しかけた。少し遠慮がちに仲間に誘つたが僕には興味はなかつた。僕は搾取された金を吸い取っていく組織に取って抵抗はしなかつた。

何も考えることもなくこうして二年が過ぎたのだつた。

一つの建物に六畳くらいの部屋が四室ほどあり、板張りの室内の両側に二段ベッドが据えつけられている。建物がいくつかあってその一つの一階が全員の食堂だつた。各建物には娯楽室もテレビもあるが博打場にもなつた。サイコロ賭博は山の飯場で見たことのある他愛のないものだつた。多くはパチンコや競艇場へ出かけていた。楽しみのプロレス中継の日

は誰も出かけなかつた。

この場所に似合わない新聞も回つてきた。四、五日遅れる

のは全部の建物を回るのだろう。一年で二度も飛行機が落ちて全員死亡、等の記事にはみんな驚いた。飛行機に乗ること自体が大変なことだつた。日本の学者がノーベル賞を取つたという記事に少しは詳しい男が説明した。日本で二人目だ。ある大学の医者が秘密裏にチフス菌を患者に与えて実験した記事はみんな興味を持った。

警官が月に一度ほど指名手配中の逃亡犯の写真を持つてきたが、本気で探す様子はなかつた。警官が交通事故にあつた貧しい老人をすぐに助けなかつたということ、大阪の下町の西成地区の労働者たちが騒動を起こした事件は、誰もが成り行きを見守り議論も盛り上がった。

時々目付きの鋭いインテリ風の若者を見かけることもあつた。彼は疑い深い眼を僕に向けた。手配された学生運動家らしかつた。

芸術や哲学や文学など真剣に議論する人間もいた。山の飯場と違ふところだつた。三島由紀夫や芥川賞の話も時には聞いたが僕には興味はなかつた。

テレビで放映される僕と同じくらいの年の若者には興味があつた。大学生の自殺も話題になつた。「最近は大学の若者の間で自主的なダンスパーティーが開かれているそうです。異性に初めて手を触れて、それで自殺する若者も減つたというデータもあります。田舎から出てきた学生は特に」という評論家の話が放映されたりした。

また東京の新宿には一日中街角に座っている者や、「風月」という喫茶店で何もしないで座っている若者たちがいる、

それをフーテンというらしかった。日本版のヒッピーだった。ヴェトナム戦争反対と声を出す若者もいる。髪の高い若い女性には「ネコ」というあだ名で人気者だった。店に来る顔見知りには声をかけ挨拶するのだけが仕事だった。「アリ」という哲学者風の中年はコーヒーを飲む手の爪が真つ黒のままテレビに映っていた。みんな何かを考えているには違いなかったが、伝わってくる物はなかった。それでも彼らの気持ちになぜかわかる気がした。自然にテレビの話題は消えて行つて僕も忘れてしまった。

喧嘩はあまりなかった。揉め事が起こりそうになると、どちらか弱い方がすぐに身を引いた。この環境の中でどう生きるかの方法を、だれもが身につけていた。ほとんどの者は弱く優しくかった。

一度だけ喧嘩というほどでもないが、目のあたりにした揉め事は悲しかった。弱々しい老人が顔をゆがめて怒つて一人の男にくつつかかっていた。男は頑強で、軽蔑の表情をあらわにして鼻先であしらっていた。年寄りの機嫌はさらに悪くなった。もう一度男が老人をからかった時、老人はいきなりベッドに身を投げて、あたりを構わず大声で泣き始めた。てめえなんか、俺が若けりやぶつ殺してやる。あまりに悲しうだった。話によると男が老人をからかったのが始まりだった。数人が白けきつた視線で男を見ていた。きまりが悪くかった男は黙って出て行つた。そしてもう戻らなかつた。

この寮で死んで引き取り手のないものは近くの寺が引き受けるようだった。長い年月のこの寺の習わしだった。

小さいけれど個室があるのを知つたのは三ヶ月ほどしてからだだった。空きが出た時に、倍の部屋代だったがすぐに入つた。同部屋人たちを嫌っているとか一人になりたいというより、ただ他人の匂いが嫌いだつた。部屋中に充満する酸っぱい埃の匂いと、反吐のような生臭さが耐えられなかつた。個室は三畳もない広さで、箱の中にいるようだったが満足だった。小さな窓もあつた。二年も過ごしたのはこの部屋のおかげだった。

二

長い間僕の心の奥底に渦巻いていたもの、噴き上がろうとしてエネルギーを貯めていたもの、その存在を無意識のふりをして忘れようとし、自然を装つて蓋をしてきたもの、それがいつの間にかもう抑えきれなくなつていた。この時期が熟するのをじつと待つていたともいえる。

過去の甘い恋や、諍いの両親への怒りなど今は些細なことではなかつた。その夏、思いもかけずに寝込んでしまつた一週間から目覚め、小さな窓から吹き込んでくる風の心地よさに触れ、その風が美しい色に光っているのを見た時、僕は解放されたと思つた。頭の中も空っぽでそこにもそよ風が吹き込んだ。色は形を持って優雅に流れた。僕の腕の筋肉は小さな痙攣を起こし、全身に広がつた。それはなにか初めてのものを獲得したいという意欲と、それが出来るはずだとい

感動だった。僕は再び絵を描くのだとはつきり自覚して立ち上がった。

絵具や筆をそろえるには金が必要だった。貯金通帳の蓄えはもうなかった。そして何をどこで描くのか。僕は長い間開かないままのノートを取り出した。湿気で黄ばんでいた。いつか開くだろうと思っていたのだ。鉛筆はそのままだったがすぐに折れた。

まず浮かんでくるのは薄汚れた同僚たちの働く姿だった。不貞腐れたような疲れた姿も、張り切って力仕事に従事する姿も、どれもいい形に見えた。表現するには面白かった。しかし僕の腕は喜びに奮えながらもまだ弱々しかった。

いい加減に鉛筆を走らせていると、ふと浮かんできたのは材木に押しつぶされて死んだ同僚の死体だった。一つのオブリジェに見え、それが美しく見えたのが驚きだった。しかしあれほど目に焼き付けたのに、鉛筆は走らずノートには貧弱な模様だけが残った。奥行きのない平坦な幾何学図だった。急に力が抜けた。眼の前に浮かんだ表現したいイメージがあるのに何の力も方法もない。苛立つて急に悲しくなつた僕に追い打ちをかけたのは、いつかの辛いペンキ塗りの記憶だった。色を塗ることは好きな作業だが、何の意味もなくシンナーの匂いに冒されて意識は朦朧とする。ただ救いは懐かしい油絵具とテレピン油の匂いが蘇つたことだった。

二年前、僕はもう決して絵を描かないと決心していたのだ。それは僕を侮辱した父への怒りだった。僕の夢を踏みにじつ

た俗人の父への侮蔑だった。何も助けられない母への失望だった。僕は自分自身を貶めたかった。自身を痛めつけ、惨めさに落ち込んでいたかった。それが両親に対する復讐に思われたのだ。それで家を出たのだった。

僕は冷静にどうするか考えた。もう一度絵を描き始めるには、初歩から学ぶことだ。昔のことを思い出していけば、感覚を取り戻すことはできる。結論は簡単だった。どこかで画塾を見つけよう。そのためには母親から金を取り上げることだった。いつも最後の手段と考えていたが、そんなに気軽にできないかと思っていた。しかし今はどうでもいい。こちらが必要だから持つて来させるだけなのだ。喜んで会いに来る母親の顔には軽蔑しか覚えないはずだったが、やはり少しは懐かしさも感じられた。おそらく彼女も長い間それ待っているに違いないと思うと躊躇はなかった。父親には内緒で来るだろう。

待ち合わせ場所を僕はわざと繁華街のはずれの小さな公園にした。そこは夜になると立ちん坊と言われる夜の女たちが集まって来るところだった。二年ぶりに会う母は大げさな喜びの表情を見せるだろうと思うと煩わしかった。あれこれぶつけてくる質問の応答を想像しながら、それでも少しは懐かしさもあつた。まず二か月ほどの生活費と画材の費用が最低限必要だ。母は夫に内緒でお金を集めるのに苦労はするだろう。それだけでなく、僕にはそれをいかに続けさせるかが問題だった。

予想通り彼女は僕の手を握り涙ぐんで僕を見つめた。そして大きさを確かめるように腕を何度も握った。本当は胸を触りたがっているがわかったが、僕はそれを払いのけた。初老の母は記憶より小さくなっていた。

セツトした髪と化粧の匂いは嫌いではなかった。いろんな質問には適当に答えた。伸びた髭と汚れた作業服には何も言わなかった。恐ろしい答えは聞きたくなかったのだろう。

「お父さんは最近気が弱くなつて、仕事もそう多くはなくなつた、近くに新しい医院が出来て」

僕は知らぬ顔をした。

「絵を描いているの」

それにも無言で答えた。

「この公園が好きでよくここに来る」

意地悪く言ううちよつと淋しそうな表情を見せた。彼女を少し喜ばせようと僕は甘えて腹が減つたと言つた。母は喜んだ。高級な寿司店のカウンターで僕は腹いっぱい食つた。彼女はあまり食べず嬉しそうな僕の表情を盗み見していた。

お金は最後まで渡そうとしなかつた。最後に僕は通帳の番号を教えた。

「これからは振り込んでくれればいいから」

「また会つてくれれば」

彼女は恋人に言うように媚を見せて答えた。僕は後ろの視線を感じたまま振り返らずに急ぎ足でその場を離れた。思つたより袋の中身は多かつた。

絵を描きたいと思うと最初に浮かんできたのは小学生のころから教えてくれていた先生のことだつた。僕を包んでくれる優しさに溢れ、絵の魅力を教えてくれた人だつた。自分がその中にいたら幸せだなと思うような絵を描くのだよ、と言う言葉を忘れたことはない。また絵の魅力だけでなく絵描きの悲しい美しさを身でもつて教えてくれた。そして尊敬していたのに、僕には一言も残さず自死してしまつた。後で絵に行き詰つたのが原因だと他人に聞いただけだつた。それからもう三年以上経っている。

小学生の頃一度連れられて、先生の先輩の画家に会いに行つたことがある。親友だという先生に比べれば厳しい顔つきだつたのを覚えている。この子はいいセンスを持つているのですよ、と僕を紹介するとやつと表情を崩した。

もう十年も前のことなので正確な住所は分からないが、探してそこを訪ねることにした。先生の親友というだけで僕は嬉しかつた。二年のブランクだけだ。僕は意欲に燃えていた。

探し当てたところは昔の記憶よりも大きな邸宅だつた。広い日本式の庭は雑木や雑草が伸び放題だつた。花をつけた沢山のサボテンの鉢植えがところどころ無造作に置いてあつた。母屋のほかに日当たりのいい建物が二棟あり、一つが先生のアトリエ、もう一つが画塾だつた。

そこは先生のかつての師の家とアトリエだつた。老いた奥さんが一人で母屋に住んでいた。亡くなった老先生が、可愛がつていた弟子にアトリエを任せると遺言したらしい。サボ

テンを養生し、時々母屋で老婦人を訪ねるのも条件だった。先生は三年のバリ留学を終えて帰って来たばかりだった。

先生は十年前の僕を覚えていた。自死した親友の弟子の一人として忘れられなかったのだろう。その懐かしそうな表情に、昔の僕の先生の面影が感じられた。

「僕は雑木林が好きで一頃はそればかり描いていた。だけどそれらに限らず面白いと眼についたものをたくさんデッサンするのだ。書きなぐりを入れて百枚でも書くこともある。そうするとその先にあるものが見えてくる。新しいイメージとすべきか。その中には懐かしいもの、憧れ、神話や伝説、昔見た仏像や、古里や物語の主人公などが浮かんでくることもある。勿論そのためにデッサンをするのではない。その時浮かんでくるイメージは美しくたまらない。それを感覚のまま描くのだ。抽象であれ具象であれどちらでも境はない。なに、他人の批評など気にするものか」

それが最初の教えだった。

「これは僕の昔の作品だ。庭中の雑草を描いた。一本一本も描いた、枯れ草も描いた、雑草の塊も描いた、それこそ百枚は描いた。すると雑草の一本一本が光に照らされて膨らんできて、いつの間にか僕の目の前はまっ白な世界になった。それでも変化はある。その中に顔らしきものが浮かんできた。誰だかは分からない。昔の友人だろうか、肉親だろうか、わからない、ただ懐かしい、まだ会ったことはないのに懐かしい顔のようにも感じられる」

画布は白く塗られ、ところどころ盛り上がり、陰影をもつ

て斜め上から下に流れている。白なのに微かに色も感じられる。その影に確かに僕は知らないけれど、懐かしいなものがある気がした。

僕は力づけられ気持ちがあふつと明るくなった。

アトリエにある画集を毎週借りるのが楽しみになった。眼前に新しい道が目映く広がっていた。亡き先生も僕を感動させてくれた。まだ見ぬ美しい芸術の街、異国の花々、腕を競い合う若者たち、真つ青なセーヌ川を渡る爽やかな風、美味しい料理、喜びの酒。

僕は仕事を週に三日と決め、画塾には二日通った。まずクロッキーを十分にやってからだと言われ、先生から与えられたオブジェに夢中で取り組んだ。

ある時は枯れかけた植木鉢で、毎週その続きを描かされた。最初は意味は分からなかったが、次第に萎れ腐っていく変化が見えるようになり、それを美しいと感じた時、僕は感動した。石膏の顔は方向を変えて、光の波の動きを楽しんだ。鉛筆を持つ手は楽しくて止まらなかった。時折り力が入りすぎて鉛筆を折った。

先生のにこやかな眼は昔を思い出させ、さらに奮い立たせた。先生は細かな指導はしなかった。その目の光で僕は何でも悟った。他の生徒の前で僕は誇らしかった。毎日が短かった。夜もその一日が思い起こされて、なかなか眠れなかった。興奮が続いたまま休みには酒も飲んだ。酒がこれほど甘く、芳しいものだったとは。

仕事を辞めることは不安だったし、仕事が好きでもなかつ

た。そして発見して驚いたことは、同僚たちの力仕事の様子
がどれも絵になりそうなことだった。彼らはスケッチブック
に収まりそうにもなく躍動し、無理やり収めてしまっても立
派な構図を作った。僕は力仕事をしながら彼らの動きを追い、
いつも見つめた。作業服の中の肉体が凜々しく動くのが見え
た。力のない老人の肉体は弱々しかったが、それなりの美し
さを持っていた。

また寮の食事の姿やサイコロ賭博に熱中する姿は、的確な
視点でとらえると美しかった。匂いさえ思い出の一点として
絵の中に蘇った。

僕の狭い部屋は紙屑で溢れ、紙の匂いが新鮮な空気になっ
て満ちていた。同僚たちは協力的で、僕を先生と呼んだ。

道路工事やビル解体の現場に、仕事を休んでスケッチに行
くこともあった。彼らの筋肉から汗は滴り落ち太陽に光った。
その汗のきらめきを絵にしたかったがそれはなかなか難しか
った。

ある時の先生の悲しい話が僕に衝撃を与えた。僕は泣いた。
その涙は悲しみの涙ではあったが悲痛なものではなかった。
悲しみは感動になった。そこには絵画で表現できそうにもな
い世界が広がっていた。それには懐かしい色と風が満ちてい
た。光と風は僕の意欲をかき立てた。僕は力を得た。

絵を再び描きはじめてどのくらいたった時だったろう。た
だ絵を描きたいと言うだけの何の目的もない日々だった。そ
れでも満足ではあったが、先生はそんな僕にショックを与え

ようとしたのかも知れない。僕はただ先生について行くだけ
だった。先生が通り過ぎた後の空気の細かな動きさえ僕は好
きだった。

「君の昔の先生、T君は僕の親友だった。ちよつと年下だっ
たが競争相手でもあった。彼は母親との二人だけの貧しい家
庭で育った。気の弱いところのある優しい男だった。彼は風
景も生物も描いたが、その描写は自然で素直だった。僕は彼
の才能を認め、その素直な絵筆のタッチが羨ましかった。絵
肌は本当に柔らかく、誰もまねできない繊細な力を持ってい
た。しかしいつまでもそれではだめだという本人の葛藤もあ
った。たろうが、それ以上のものを目指して、打ち破ろうとす
る強さはなかった。気の落ち込んだ時は、小学校か中学校の
絵の先生でいいとさえこぼすこともあった。恋人との静かな
人生もいい、が彼の口癖だった。その都度、僕は彼を激励し
た。そして怒りつけた。興奮して涙を流して僕に感謝したこ
ともある。僕は僕で彼に当たる必要があることもあった。僕自
身を奮い立たせることもあった。ただ好きな絵を描いて、
静かな何の変哲もない人生を送ることしか僕らの前にはない
のか。

丁度その頃、ほかのグループが現代美術集団を立ち上げて
世間の評判をとっていた。決して絵ではない絵画を、今まで
にない色の絵画を、今まで決して存在しなかった空間と物体
を、というテーマらしかった。僕たち二人はそれらを嘲笑し
ていた。

市が新しい美術館を建設することになったのはその頃だっ

た。その記念に市と美術協会が現代絵画コンクールを主催した。最優秀賞はバリの半年の滞在費だった。行くだけは誰でも行ける。この特典はフランス文化庁の許可のカルトを貰えて、どこの美術館でも自由に模写が出来るというものだった。勿論僕も彼も応募した。

結果は僕が優勝した。僕の後に続いたのは、アバンギャルドのグループの作品だった。T君の作品は佳作にもならなかった。綺麗な絵だったが。彼は僕に祝いを言うこともなく、会いにも来なかつた。僕は有頂天で、渡航の準備に忙しかつた。新しい美術館がオープンして展示会が催された。出品作品の多くが展示され、彼の絵も出された。しかしそれは末席で、軽蔑するグループのはるか下だった。そして僕は展示室でT君の作品を嘲笑っている彼らを見た。その声がT君に届いたかどうかまでは知らない。僕は出発した。一か月ほどしてほかの友人からT君の自殺の知らせが届いた。恋人が彼のもとを去つたためだろうと書いてあつた。僕は絵のことでなく恋人が原因だと思いたかつた。僕は泣いた。渡航の前になぜ彼に会いに行かなかつたのか。後悔しても遅かつた。悲しかった。悲しみの僕の体にバリの空気は流れ込んだ。なぜかそれは勉強する意欲になつた」

「それから貧乏暮らしをつづけ、半年の予定を三年間に延ばしパリで過ごした。美術館めぐりや模写の時間は楽しかつた。特にピカソ美術館では少年の頃から時代を追つて順番に絵を見る事が出来る。その変化について行くのが面白かつた。それを追つて僕も描いて行つたが、途中で挫折した。描かれ

た線の一本一本の美しさ、強さに対する畏れが出てきた。模写しても僕の力が上達するわけではない。それほど強い。こちらの未熟さに力が萎えるだけだった。

蓄えも減り絵が売れるわけではなく、アルバイトに精を出すしかなかつた。いろんな展覧会にも出品した。注目を受けることもあつたが、画廊はそんなに簡単に声をかけてくれない。金がなくなると、固くなつたパンを水に漬けて増やし、それに小分けした鱈の缶詰の汁を入れる食事が一番の節約で、長い時間を耐えられる。幸いに模写を続けることが出来た。しかし体を壊し、ほかの事情もあつて帰つて来た。また行くつもりだ」

先生は自分に言い聞かせるように言つた。

「佐伯祐三という画家がいた。四十年ほど前、三十歳くらいでパリで死んだ。画家としては十年も仕事をしていない。ずっと貧乏暮らしで絵を描いていた。最後は胸を病み、血を吐き森の中を叫びながら彷徨つていた。雨の中だつた。苦しかつたのだろう。そして精神病院で亡くなつた。奥さんが看取つてくれたのがせめてもの救いだつたが、その奥さんも小さな子供を残してすぐに亡くなるのだ。悲しい人生だ。

それを思いながら彼の絵を観ると、絵描きの宿命も感じる。彼の絵は、特になんというでもない下町の建物や広告塔やカフェなどだ。なぜか落書きのような文字が絵の中に多い。人物もある。何の変哲もないそれらに何故そんなに情熱を注ぐのか。気が狂うまでそれらを見つめるのか。特別な美しい対象でもない。写真ではなく、具象でもまして抽象でもない。

それを思うとさらに悲しくなる。

しかし傾いた建物や古い汚れた色の壁などが、絵の中では妙な安定感があり、見る者にふと安らぎの一瞬を与えるようでもある。美しいと思うこともある。作品はそんなに多くはないが、誰が見てもすぐに彼の作品だとわかる独特の世界を持つている。彼の作品は美しく悲しい。僕は行き詰ると、彼がさまよった森を散歩するのが好きだった。彼と語り合いたかった。

汚れた服はそのまま髪も髭も何日も手を入れていない、僕はかつてのT先生のそんな姿を思い浮かべようとした。しかしあの柔和な先生の姿を想像することは難しかった。気が狂うほど対象に没頭する先生はいなかった。

思い出すこともある。家庭教師に我が家に来たときに、無精ひげのままのT先生をからかったことがある。母も朗らかだった。ちよつと不良の真似をしてみたかっただけじゃないの、と言う母に先生は恥ずかしそうに笑ったのだ。先生のその時のはにかむ笑顔も忘れられない。楽しい時もあったのだ。今はその色白の柔和な先生の悲しみに打ちひしがれて崩れた顔が、苦悩に歪んだ表情が見える。そして虚ろな足取りで死へ吸い込まれて行く姿。

僕は借りた佐伯祐三画集を毎日開いた。見つめ模写した。引き込まれ苦しくなることもあった。何故この小さな世界に、異国のしかも下町の隅つこの大した価値もないような世界に魅力を感じるのか。汚い壁や無造作に置かれたカフェの古椅子に彼はなぜ情熱を傾けて筆を進めたのか。報われない存在

が、価値のない虚しさがまるで美しいとも言うのだろうか。流動する形のない構図が様々な色に変化して、僕を夜毎夢の中で襲った。その隙間に、先生やT先生や知っている画家の表情が見え隠れした。笑ったり悲しんだり狂ったりしていた。僕もいつかは新しい街で、まだ見知らぬ世界で、異国で絵を描くことがあるだろうか。絵筆を持つ腕の筋肉は力が張りつめ、躍動するだろう。まだ実感と自信はなかったが心は躍った。僕はそろそろ油絵に戻らねばならない頃だった。

三

生徒は退職した老人や主婦が主だった。長く続けているようでそれなりにいい絵を描いていた。静物が主だった。僕は、ここはあくまで入り口だ、彼らとは一線を画さねばならないと思っていた。先生の指導にはついて行きたいが、いずれここを飛び出さねばならない。今はまだ助走期間だ。本当の闘い、ライヴァルとの競争、そして己の目的とする芸術の真実を勝ち取る戦いに、いずれは全身を投げ込まねばならないだろう。他の生徒と話をすることはあまりなかった。時折り僕の絵を覗き込んで、褒め言葉を投げかける者もいたが、僕は無視して絵筆を走らせた。

ただ一人だけ変わった男がいた。生徒と言うよりはアトリエの間借り人と言った方が正確かも知れない。彼はアトリエの一画を占めて勝手に絵を描いていた。気が向いたら、描き

かけの生徒の絵を見まわりながら声をかけることもあった。遠慮がちで言葉も優しかった。先生の弟子か友人だったのだろう。僕の絵を見ても何も言わなかった。僕は声をかけてほしくなかった。

痩せて物腰は軟かそうだったが、体の芯はしっかりとっていた。白髪交じりの整えられていない頭髪から覗く表情は、僕には不遜にも卑屈にも見えた。彼は片目で、もう一方が暗い光を放っていたからだ。顔の半分はゆがんでいた。大怪我でもしたのでろう。それ以外には表情は動かない。何を仕事としていいのかわからない。いつも作業服で清潔とは言えなかった。風貌よりも若いのもかもしれない。宮本という名前だった。

ある時、僕のスケッチブックを断りもなく黙って見た後、僕を自分のコーナーへ来るように言った。作業する同僚のスケッチばかりだった。それが気に入ったのだろうか。僕は気のりしない態度で従ったが、彼が部屋の隅から取り出して見せてくれた絵に驚いた。

数本の大木が嵐の夜に吹き煽られている。暗青色の夜空には獯猛な風が荒れ狂い、大木は両手を大きく空へ向けて風と闘うがごとく怒っている。木々の生々しい躍動感が画面いっぱいに満ちている。

「これは俺が昔描いた作品です。君のを見ていると思ひ出しましたよ」

彼の表情は分からなかったが、不精髭と分厚い固い唇が感じられた。僕は嬉しくなった。素晴らしい絵だと思った。じ

つと見ていると怒りの大木の荒れ狂う様が僕と同調して心安らぐようだった。

彼を好きになるのに時間はかからなかった。ただ他人を寄せ付けない壁を周りに張りながら、時には厳しく見下し、時には柔軟な低い腰でその場を避けようとする、掴みどころのない彼の雰囲気は僕は戸惑っていた。いつも丁寧な言葉と、投げやりだが厳しい言葉がまじりあっていた。僕を呼ぶときの君と言う言葉には尊敬の念が感じられ悪い気はしなかった。酒を酌み交わすことが多くなった。彼は深酒をして酔い潰れることが多かった。初めは何時も意気込んだ美術論からだったが、最後は蒼白な顔色で力を失くし貧弱になった。

「昔は、美は乱調にあり、と言う言葉が好きだった。新しき、美しさは反体制にしか存在しない。だが、体制に反対するために美を創造するのではない。現状を美で変えようとするのでもない。ただその意味を持つ美だけが光を放つ。力を持つ、持たなければだめだ」

「だが美は存在する。時代も体制も関係なしに、存在する。確かに人によつてそれは違うかもしれないが、一度それを知つてしまうと、人はもう耐えられない」

このあたりから彼の言葉がだんだん聞き取れなくなる。

「弱い心はだめだ、弱い肉体も駄目だ。おれは自分自身の弱さに気付くと酒を飲む。自身に対する怒りで酒を飲む、酔う。悲しい、苦しいこともある。酔いすぎると苦しい。悲しみや苦痛を酒の苦しみに変えるのだ」

「悲しみや怒りをカンバスにぶつける時でも、筆のタッチは

楽しい。最初の一笔一笔を指や手一杯にありたけの愛情をこめて注ぐのだ。だが俺の見た、俺だけが知っているあの美はどこへ行った。決して忘れられない、あの美は確実におれを襲ったのに、おれには見えるがみつからない。どこに隠れているのか」

彼は深酒で相当に身体を壊しているに違いなかった。酔いが早くなり時々血を吐くとも言った。酔いが回ると喋る声もはつきりしない。

僕は彼の花の絵が忘れられない、と言った。それは抽象でも具象でもない深紅の牡丹だったが、その色に不思議な霧りが潜んでいる気がした。背景は暗い紺色で、よく見ると誰かの顔が浮かんでいるようだった。美しいと言うより、それには激しい怒りか悲しみが秘められているようだった。この凄みは僕には到底描けない。彼は一つしかない眼を瞑って呟いた。

「あの花の色は絵具に蚊取り線香の灰を混ぜたものです。花弁の厚みを出すためにね。現実の美しさを超えるのが絵だ。現実にはない色を出したい。いや本当はね、君、内緒だよ、思いが入りすぎて耐えられず、俺の精液を混ぜたのだ。俺の見た美はそれでも体で捉えられない」

そんな話の繰り返しだった。

ある時いけないと思いつながら聞いたことがあった。宮本さんは何時から片目になったのですか。遠近法に不便ではないですか。彼は僕をじっと見つめた。最初彼が怒っているのではないかと思つたが、それでもなかつた。僕に何か訴えたか

つたようだった。君なら理解してくれそうだとでも言うように哀願するようでもあった。それでもその時は何も答えなかつた。そして悲しげにもう一つの目も閉じた。

築港に注ぐ大きな川は汚く、その河口一带と国道との間に広い地区を占めた一つの集落があつた。第二次大戦の後、中国や朝鮮から引き揚げて来て、故郷へ帰らずそのまま居ついた人々がいた。行くあてもないのだつた。戦争中に朝鮮から強制連行され、迫害されながら居続けた中には、戦争が終つても祖国へ戻れない人々もいた。また空襲で家をつつた人、昔からその辺りで貧しい生活を続けている人々も多かつた。

川に張り出したいくつかの小屋は養豚場にもなつた。汚物は川に流れた。不規則な市場も数軒の店になり安定した。この無番地の集落も戦後十年も経つと、市も認めないわけにはいなくなつた。戦後すぐに生まれた幼児もそこを故郷として界限を走り廻り学校に通つた。

それぞれのグループはお互いに牽制しあいながらも協力は惜みず、集落を発展させた。継ぎ接ぎだらけの違法建築が次々に建てられ、電気や水道は至る所に分岐された。朝鮮戦争の勃発で、築港の仕事は充分な生活の糧になつた。朝鮮からの密航者たちにとってはここが終着駅だった。

女性たちは市内の歓楽街で稼ぎ、男達の中には闇の世界で自身を蝕みながら享楽の日々を送る者もいた。ヒロポン中毒は流行りかけたが、自浄作用ですぐに収まつた。確定した追及でもないかぎり警察はこのあたりを搜索しなかつた。組織

でもない人々の連帯だったが、治外法権をいつの間にか勝ち取っていた。

僕の住む界隈から川を隔ててその集落が見えていた。雨の日は靄がかかり、それが大きく膨らんで強固な要塞のように見えた。夜でもその周辺の空はうつすらと明るく、不気味な不夜城であった。惹きつけられる不思議な何かがあった。国道を散歩する時、興味を持って傍を通ったりしたが、中へ入る勇氣はなかつた。そこに出入りする人々は誰も無口で異邦人に見えた。

その入り口に木造の白い二階建てがあつた。古い家でベニキが剥げて傾いていたが、その傾き具合が僕の眼には妙に面白く映つた。おそらく戦前からの建物に違いない。童話のような西洋風の窓はいつも閉まつている。この家の人には何か悲しいことがあるのだろうか。両側の煤けた集落の家とは不釣り合いだった。いつかこれを描いてみたいと、画架を立てて描いている自分を想像していつも通り過ぎたものだった。

しばらくして傍を通るとその家は無くなつていた。汚い土の色だけが残つていた。僕は愕然とした。静かに姿を消した家が懐かしい。あの時の空は漆黒だったが妙に明るく光つていたように思う。住人はいたのだろうか。それとも淋しそうに去つていったのか。僕はいつか描きたいという気持ちを残して楽しんでいたのだ。後悔が僕を勇氣づけた。

ある時ついに僕はその界隈に足を踏み入れた。思いのほか通りは広く、道を挟んで両側にぎっしりと掘つ立って小屋が犇

めき合っている。ところどころに壊れそうだが古い二階建てもあるのが不思議だ。雑貨を売っている店、食堂らしき小さな看板。家と家の合間を繋ぐようにトタン屋根の小屋がある。そこにも人が住んでいるようだ。そこからのいくつかの視線を感じる。

建物と建物の間の空間は路地だ。その先にはまた同じような小屋が並んで、見慣れないものが広がっている。懐かしいものがそこから僕を呼ぶようだ。道は限りなく奥まで続いている。道には材木やガラクタが積み上げられている。

家の前では数人の老婆がしゃがんで洗面器で何かを洗っている。店らしい棚には野菜が干からびたまま並び、干し魚の周りには蠅が飛び交う。虚ろな眼差しで僕を見つめ座つたま動かない人。

空は真つ青で風が吹くと砂ぼこりが舞いあがる。行きかう人々には影がなく、僕を無視して静かに通り過ぎる。走り廻る子供の声さえ聞こえない。時々遠くに犬の鳴き声がある。それは豚の声かもしれない。腐った野菜の匂いと養豚の糞尿の匂いも一瞬の風に流される。

この新鮮な異空間への驚きは僕の自制心を解いた。僕は捨てられた材木に腰掛けて、それらの家々を描き始めた。古い板壁は何としてでも表現したい色をしていた。親しい友人の家のような気もする。隣の家に依りかかった小屋はその姿が可愛らしかった。そこに一人で静かに住んでいたい。

老婆たちは描いている僕に気づかないのか、ずっと同じ作業をしている。洗っているのは白や赤の肉の臓物のようだ。

どれ一つ同じものはない。壊れかけたものまで僕のスケッチブックの中では力強い構図をつくり、優しい表情を見せる。古く汚いものがなぜこんなに美しく見えるのか。初めて吸うこの空気が何故僕に安らぎと感ぜられるのか。それは神秘的でさえある。次はかまうものか、腰を落ちつけ画架を立て色を塗る、と僕は決心した。

宮本さんが、君はどこに住んでいるのですか、と聞いてきたのは単なる偶然だったのだろうか。僕には必然としか思えない。僕の部屋の事情を話すと、自分の近くに空いている部屋があるから来ないかと言った。そんな部屋では自分の勉強はできないだろう、どうせ空いているから部屋代は今と同じでいいよ、と言ってくれたのだった。

それがこの集落だったのだ。二年ほど過ごした今までの部屋を引き払うのに何の未練もなかった。仕事は気ままな時、金のない時に出かければよかった。惜しんでくれる同僚もいたが、僕の関心はすぐに次の部屋に移っていた。

その日は午前中の雨が止んだばかりだったが、また蒸し暑かった。道はぬかるんでいたが僕たちはかまわずに歩いた。泥は乾けば落ちるからだ。

宮本さんと話しながら、僕はどの家を描こうかとあたりを見回していた。灯のついた家もあり、夕方の安らぎが感じられる頃だった。すれ違う誰もが宮本さんに挨拶した。僕は嬉しくてこれらの家が美しく見える、どれも描きたいと言うと、彼も満足そうに微笑んだ。僕は崩れた彼の顔から、微笑みや

感情を少し感じることが出来るようになっていた。

部屋は二階で六畳くらいの板張りだった。隅に鉄製の病院ベッドがあった。川に面した窓からは対岸の家並み、いくつかのビルもあったが、それらの先に夕焼けの残りが見えた。雨上がりの風も少しは吹き込んだ。この界限で想像していたのと違って多分とっておきの部屋なのだろう。ここでいい絵を描こう。誰もが驚き、僕に賞賛の眼を向けるだろう。力が漲つて来て身が震えるようになった。お礼を言うと、彼は僕に顔を見せないで言った。

「ちよつと臭いかもしれない。豚小屋が近くにあるからな。大雨が降った時、豚小屋が流されたことがあった。濁流に飲み込まれて豚が泣きながら流されて行つた。可哀そうな声だったよ。まあ、声が聞こえたわけではないけどな」

それから静かに言った。
「ここは昔は妹の部屋だった。もう亡くなつた。七年ほど前になるかな」

そこで過ごした最初の夜を僕は忘れられない。夕方になるとぞろぞろと人が出てきた。地中や暗闇から湧き出てくるようだった。暗い少ない街灯の下で人々は散歩するように歩いたり、数人でしゃがみこんでお喋りしたり、たき火を囲んで何かを焼きながら男たちは酒を飲んでゐる。分け前を貰おうとすり寄って来る子犬。平和な暖かい夜だった。遠くの車の警笛もここでは快い刺激だった。

誰も何の疑いも不安も誰も感じていないようだった。皺だ

らけの老婆にも日焼けした頑強な男にも僕は微笑みしか見なかった。捨てられたガラクタも装飾品の一つになっていた。夜風が時々吹き抜けた。夜空は美しい青色でどこまでも澄みきっていた。夜が更けると人々は次第に姿を消した。闇があたりを占め静寂が訪れた。僕にとつては神秘の世界だった。

四

ここで僕は絵を描き続けた。何枚描いても終わりはなかった。

仕事へ出かける時間は無駄で最小限に抑えた。母親からの送金は多くはなかったが、画材には困らなかった。食事はこの界限で過ごせば少なくなくて済んだ。

この全ての家と通りを描くには時間は十分にあつた。その日の空と風と陽の光で対象は様々に変化した。季節によって家々はその輝きを変えた。その都度、新しい作品は生まれた。道も埃も臭いさえ僕の絵の中では新鮮だった。店先の萎れた野菜や、腐りかけた肉や魚はその古さのまま、僕の画布の中で生き返った。老人や子供たちの動きはいつも優雅で美しかった。

画布へ向かい最初に対象物を見詰める瞬間はもう興奮の始まりだった。その印象は制作中にいつも変わった。勝手に変形した。それを追う過程がまた楽しかった。変化が大胆であるほど、絵の出来上がりは満足できるものだった。

傾きかけた板塀が画布では傾いたままであつたが、絵の中では安定した構図になつた。曇り空は灰色ではなく時には茶色に塗り込められ、その下の家並がやすらかにまどろんでいたりする。描いているうちに別の面白いものが見えてくる。

新しい色が目くるめくように次から次に目の前を通り過ぎた。絵具にはない色だった。その瞬間を掴んだ時は興奮した。誰も理解できない僕自身の色だった。それを掴むとすぐ次の色が躍り出た。今まで感じたことのない色が別の色を呼ぶ。走馬灯のように回りはじめ。現前の対象物はどうでもよくなる。それは快感であり感動であつた。

その対象を探すこと、今は見えないけれど先の方にあるもの、薄闇の向こうにあるはずの物、それが何であるか分かつているようで分からないもの、それを求めることが激しい欲求であり快感だった。

この界限は閉塞されていたが、僕にとつては画材の宝庫であり、広大な自然だった。知り合いも出来たが、僕は孤独だった。その孤独を愛し、凜として生きていた。絵筆を持つと力は新鮮な泉からとめどなく湧き出た。空は曇っていても晴れていても嵐でも、無辺の天空に突き抜けていた。

僕は県展で賞を貰い注目された。さらに上を目指すには十分な力があると評価された。佐伯のようだ、という評価をしてくれる人の話は僕を有頂天にさせた。さらに張り切らねばならなかった。

県展の賞くらいでそんなにも喜んでばかりではいられなかった。先生も本気で僕を競争相手とみなしてくれようだった。

た。君も早くどこか外国へ修行に行かなくては、という先生のアドバイスもあった。僕はラジオ講座でフランス語の勉強を始めた。街の小さな画廊で個展も開いた。評判はよかったがそれと絵が売れるのは別だった。

宮本さんはこの街の美術界では一目置かれていた。相変わらず花を描いていたが、花の色はもう秘めた翳りのある美しさを描くだけではなかった。隠す物はなくなっていた。凄惨な色はまるで怒りか復讐のように見る者に襲いかかった。背景の暗さは花の色を拒否し、押しつぶそうとするが、花はそれに抵抗する。その戦いを絵の彼方から見つめている一つの顔。悲しみに潜んでいるように見える顔。

宮本さんは酒が弱くなつた。僕以外とは飲まなかつた。いつもより長い時間飲んで喋つたある夜、血を吐いた。救急車で運ばれたが、もう生きては帰つてこなかつた。

宮本さんは心から僕に胸を開いてくれた。酒を飲むたびに愚痴でもない思い出や、悔悟でもない話をとぎれとぎれにしてくれた。彼の怒りや悲しみを理解するのは僕だけでいいとでもいうようだった。それは片目の奥底に時折り見える、絶望ともいえる黒い光がすべてを物語っていた。僕は何一つ忘れまいとした。

五

おれは釜山で育つた。大工だった父は日本人だが、朝鮮人

の母の家に入り婿のように住んでいた。おれは本当の子供だったか、どちらかの連れ子であつたかもしれない。ほつておかれただけで、あまり可愛がられた記憶はない。仕事と酒の父と、戦時中の朝鮮女性は子供を構う暇はなかつたのだろう。また愛情を求めて、答えて貰える時代でもなかつた。

小学校では当然いじめられた。それは陰湿だった。彼ら日本人の地位のある家庭の子供が、おれをいじめめるのではなく、おれに現地の弱いものを虐めさせるのだ。おれに両方の血が混じっているのが面白かつたのだろう。いじめられた子はおれを内心馬鹿にしている。両方から軽んじられながら、いつの間にかそんなへりくだつた居心地に慣れてしまつた。意識しないままそうやって生きることが自分に合つていと思ひ込もうとしたのだ。大人になつてもその性格のままだ。

おれが十歳の頃、妹が出来た。邦子という名前だった。おれはこの子が可愛くて仕方がなかつた。一日中あやしていても飽きなかつた。両親がおれに向けた笑顔はその時くらいだった。しかしそれは長く続かなかつた。戦争が終わり混乱が始まつた。数か月のうちに満州や北鮮から難民が歩いて押し寄せた。人々は襤褸をまとひ裸足だった。殺された日本人や女性は話題にもならなかつた。母のおかげでおれの家族は比較的安全だった。

父は帰国するために奔走した。大型の漁船が発売することになった。疲れのためか難しい顔をしていた母は、出港の寸前に船を降りた。家族を見送ることもなく走つて逃げて行つた。父もおれも母へ対する怒りを覚える暇はなかつた。走つ

ていく後姿をおれは理解できる気がした。

おれは一晚中邦子を抱きかかえて船倉で蹲っていた。詰め込まれた人々の不安と怒号のうねりに背を向けて耐えた。辛くはなかった。邦子はおれの胸の中では静かに眠っていた。

その後のDDT散布やテント生活や検疫の時もおれは邦子を離さなかった。アメリカの軍人はそんなおれに優しくかった。

そのまま父はここに住むことに決めた。大工だった父は材木を集めて小屋をつくった。次第にそれは大きくなっていた。他人に頼まれて作ってやることもあった。それが父の仕事になり収入源になった。引き揚げて来る人達、朝鮮へ帰ろうとする人達、行くあてがなく集まって来る人たちでこの界限は膨らんできた。

父の稼ぎは大きかったのだろう、古いが二階建ての家を買った。新しい女性と一緒に住むことになった。優しい人だった。彼女が初めてわが家に来た時のお土産がクレパスだった。おれはそれで邦子の顔を描いてみんなを喜ばせた。

父は酒は飲んだが出かけることはなく、小さいながら幸せな家庭だった。父の焦燥は知らない。父は夜は古いラジオで進駐軍ベースの音楽を聴くのが楽しみだった。邦子は新しい母よりも毎日おれに抱かれて眠った。

そんな父もおれが中学生の時、事故であっけなく死んだ。周りの人たちは親身になっておれたちを見てくれた。おれは誰かに面倒を見てもらうために、従順な少年のふりをして、そのとおりになった。母は小さいながらも食堂を始めた。生活は苦しかった。邦子は可愛らしく利発だったので誰からも

好かれた。

学校は楽しくなかったが、絵画の時間だけは得意だった。友人は時にいなくなった。喧嘩もしたが強くはなかった。おれはこの集落の人間ということで、中学校では特別のグループと認められて守られ、何の物怖しも覚えなまま日々を過ごした。

それでも中学を出ると新しい世界へ出て行きたかった。地元での仕事はなかった。おれは近所の朝鮮人の紹介で、東京の焼き肉店で働くことになった。寮生活で食費は夕夕同然。人の嫌うことを何でもやった。いじめられても下積みでも何も気にしなければ、その方が気が楽で存在感も感じられた。無茶な希望や馬鹿な高望みしなければ、毎日楽しい。金は貰えるし、邦子への少しの仕送りが嬉しかった。余るお金はトルコ風呂で使った。十七歳でもう女体の全てを知り尽くした気になった。

だけどもよんなことからこの道に入り込んでしまった。知らなかったら今はどうしていただろう。路上で絵を描いている若者たちに出会ったのだ。酔っぱらいの顔を描いてお金を貰う。お金より面白そうだと思っただのが始まりだった。おれは彼らに自分も描いてみたいと頼んだ。いままででは真面目なデッサンなどしたことはない。中学時代の水彩の経験、ただ。お客の顔を見る。初めにそのお客の顔の特徴が面白く見える。それを大きく強く書く、すると出来上がったものが褒められる。お前、本当に勉強していいの、それにしても上手だ、といわれると嬉しい。だんだん焼肉屋の仕事がおろそかにな

り、絵にのめり込んでいったのも仕方がない。

彼らは数人で共同生活をしていた。とうとう自分もそこに住むことになった。さらに毎日が楽しくなった。暇な時は酒を飲んだり歌ったりして騒ぐ。希望に燃えたものもいたし、夫婦でこの仕事にすがっている者もいた。おれは楽しいだけで共同生活の下働きも嫌いではなかった。何年もこの生活は続いた。巢立つていくもの、新しく仲間に入つて来るもの、相変わらずおれは下働きの雑用係だったが絵には自信がついてきた。

だがいつまでも続かない。地元のチンピラヤクザに脅されてピンハネされるようになった。その交渉役は自分だった。最初は随分殴られた。彼らの殴り方は上手で、本気で傷つけるわけではなく、怖さを植え付ける。殴られると最初は痛いけど時には優しさを感じることもある。仲間から割り当てのお金を徴収する。おれはチンピラの側に立っているような錯覚さえ覚え始めた。仲間はおれを見下し始める。そしてそれは長くは続かなくなつた。お金の要求がだんだん増えて、それはもう耐えきれないほどになった。共同生活は解散になつた。最後の日、おれは皆からさんざん殴られて唾を吐きかけられた。それでも楽しい数年間だった。

それから飲み屋の客引き、日雇いなどいろんな仕事をした。タクシーの運転手が一番実入りがよかつたが、十二時間仕事をすると、部屋に帰つても疲れて絵を描く気にはなれない。酒を飲んで寝るともう次の仕事。絵を描きたい気持ちは募るがまた酒に浸る。絵を描きたいなどと思わねばよかつたと後

悔し始める。

たまに美術館や展覧会に行く。感動して力が湧いてくることもあるが、大抵は自分と比べて自信を失くす。こんな作品くらいならおれにも描ける、だがこれらを越えるくらいのもを描かないと、自分には意味がない。しかしなかなか描けない。悲しくなつて自分への怒りが沸き起ころ。自分には中途半端な力しかないのだ。才能はない。それなのになぜ描こうとするのか。つまらないものを描いても仕方がない。完全に自信喪失してしまつた。体の衰弱と相まつて、ついに絶望の淵に立つてしまつた。おれが生きていくことに、なにか意味があるのか、いや無い。ならばなぜ生きていかねばならないのか。おれ自身のこの穢い身体が、何の役にも立たずここにあるだけではないか。自分の肉体への怒りさえ湧いてくる。将来も何もない。おれはしばしば自殺を考えた。

食堂をやつていた母が亡くなつたのはその頃だ。邦子は高校を出てタイピスト学校に通つてあと一年で卒業だった。おれはここへ帰ることにした。何年東京にいたか分からない。食堂を邦子が続けてもいいと言つたが、そんなことはやらせられない。おれは焼きそばをつくり一銭洋食を焼き、おでんやホルモン焼きや酒を用意した。近所では必要とされた食堂になつた。

体調が戻つたおれは絵を再び描き始めた。動機はおれ自身の根底にある怒りだった。中途半端な才能は苦しい。努力して少しはうまくなつても決して満足のできることはない。絵画の美がそこにあるのに、おれの才能では掴みきれない、

決して表現できない、その苦しみを怒りの衝動で表現するしかなかつた。集落の近くに古い町工場があつた。その小さな倉庫を借りておれのアトリエにした。中学時代の絵の先生が画塾を開いていると聞いてそこで勉強もした。市内である程度の評価を貰うようになったが、おれは悲しく不満だつた。

邦子が亡くなる三ヶ月ほど前だつたらうか。おれは宿命ともいえる時を迎えた。残酷な美とでもいおうか、それがおれの心を貰いておれを打倒した。激しい絶望の瞬間だつた。

邦子は卒業して臨時職ではあつたが、大学の研究室のタイピストの仕事に着いた。試験を受ければいつかは正式の職員にもなれると喜んでいた。その天文学の研究室は新設されたばかりで、若い人が多くて楽しいと邦子はいつも言っていた。

教授の平井先生は日本曆学会の会長でもあつたし、中国から渡つてきた古い星図の研究をしている。歴史で一番古い星図が出来たのはギリシャだが、それはローマに渡りアラブとの戦争でイスラム教徒が全部持つていった。それからの千年あまりはそれを基にずっとイスラム教徒が研究を続けていた。

一年後にはこの大学で学会を開くとの事だつた。「天のシルクロード」というテーマで、その星図の歴史と比較をする。すなわち二千年以上も前の星図に現れた星が今はどうな星図に描かれているか。パリの天文台や国会図書館には世界中の古文書が集められ、その中にも古い星図が沢山ある。平井先生はスペインに残つた僅かの資料を研究して帰国したばかりだつた。

妹はおれによく喋つてくれた。星には別に興味はなかつたが、妹の嬉しそうな表情が、たまに見る夜空の星をより輝かせてくれた。また研究員や学生のそれぞれを面白く語つた。彼らの中で嬉しそうに澁刺と仕事をしている姿を想像して嬉しかつた。決して美人ではないが素直な明るい彼女に学生たちも好意を持つているに違いない。

「助手の於田先生はとても素敵よ、お兄ちゃんとは全然違ふ、背が高くおしゃれじゃないけど、紳士で、なにかがとてもいいの、勿論頭はいいし」

そんな話をする妹のいたずらっぽい表情が何とも可愛かつた。話だけでおれもその於田先生が好きになつた。先生が学会の打ち合わせでパリから戻つて来た時は、妹にお土産を買つて来てくれた。安っぽいスカーフだつたが邦子は使わずに大切にしまつていた。

しばらくしてパリの天文台から学会の手伝いに女性がやつて来たということだつた。アラビア語フランス語日本語が堪能で、天文学も勉強して古い星図の研究をしている。特に今回の学会はアラビア語の解析が中心になるとのことだつた。

於田先生はその女性とパリ天文台で一緒に準備し、学会の中心になるらしかつた。とても仲がいいのよと、その親密さに妹は若干嫉妬を覚えたようだが、どうなるはずでもなかつた。ちよつとした冗談に過ぎなかつた。

美津子という名前だつた。彼女が妹の邦子を特に可愛がつたと言うのは当然だろう。美津子には随分昔に亡くした妹がいて、それがクニコという名前だつたらしい。そして邦子に

よく似ていると。二人は休日などは買い物をしたり、名所巡りに行ったりしていた。父親が日本人、母親がフランス人で、二人とも戦時中に亡くなつたらしい。

ある日、邦子が美津子をおれのアトリエに連れてきた時は驚いた。おれの絵を見たいとの事だつた。おれは絵具で汚れた作業着のままだつた。

美津子は大柄で髪を無造作に片まで垂らしていた。色白の面長の顔は少しふつくらしている。澄んだ眼は懐かしいものを探そうとするようにおれを見詰めた。おれは落ち着いて挨拶がでなかつた。背筋をすんなり伸ばしている印象だけでどんな服を着ていたかは覚えていない。飾り気はまったくなく、気品だけあつた。彼女が挨拶に微笑んだ時、おれは春の風にふわつと抱かれていく気がした。彼女は美しかつた。おれが美しいと想像する女性そのものだつた。おれには彼女に目を向ける余裕はなく、踵のない白い靴と形のいい足首だけが眼に残つた。しかしおれとは違う世界の人間だつた。おれは何故か悲しくなつた。おれはぶつきらぼううに対応した。

絵を見られるのが恥ずかしかつた。弱々しい力で描きなぐつただけのものだつた。公園で風に揺れている数本の木だつたが、それらが怒つていくように描きたかつたものだつた。しかし弱い力でしか表現できていなかつた。美津子はそれを黙つて見ているだけだつた。おれは握りしめている手のひらが汗で濡れているのを感じた。おれも何も言えなかつた。

父も絵を描いていたの、と言つた時、おれは彼女をさらに遠く感じた。おれの知らないフランスの街はどんな光が満ち

ているのか。その絵の輝き。幼い彼女を愛していた父親の笑顔がまぶしく思われる。この錆びた鉄工所の隅の薄闇で何の価値もない絵を、地面に座り込んで、ただ衝動を垂れ流すように絵具を塗りつけているおれとは世界が違う。おれは微笑んだつもりだつたが、卑屈な愛想笑いに見えた。おれは自分が惨めだつたが、彼女の前ではそれが落ち着きになつた。

「お兄ちゃんの焼きそばを食べませんか」

邦子がそう言つた時はまた驚いた。おれたちのこの界限は滅多に見知らぬ人の訪問を受ける場所ではない、誰も寄せ付けない、それが住人達の暗黙の約束だつた。風の強い日の埃と湿つた日の泥濘と、いつも漂う悪臭に初めての人には必ず怖気着く。病人のようにじつと小屋の前で座り込んだまま動かない人。はじめて見る光景に、特別のことがない限り他人の再来はない。そして住人達へは、不気味さと怖れの視線だけが残る。しかし妹はまったく気にしないのだつた。

おれは妹と別れ、美津子と二人だけで界限を歩いた。道はとどころぬかるんでいた。彼女の靴は汚れた。臍物を洗つていない老婆の頭越しに洗面器を覗き込んだ。顔をしかめるのではないかと思つたがそのままだつた。匂いはそよ風では消えなかつた。トタン屋根や木造の小屋を珍しそうに見た。

捨てられたガラクタにも興味があるようだつた。おれは少し嬉しくなつた。わざと汚れたのも、珍しいものを見せてやりたくなつた。貴婦人の前でへりくだつた奴隷はこんな気持ちなのだろうかと思う余裕も出てきた。おれの近づけない高潔

な人種だ。畏れ多いとはこれなのだ。何故彼女がこんな界限に興味を持つのが分からなかった。何か秘めた想いでもあるのだろうか。

おれは何も考えられず、ただ焼きそばをつくった。彼女は汚い店内を珍しそうに見回してた。油の浸みた壁の、ヤクザが殺される場面の映画のポスターに少し悲しそうな表情を見せた。おれたちは何もしゃべらなかつた。どんな味を付けたかまったく覚えていない。

彼女の美しい口が音を立てずに焼きそばを吸い込むのを黙って見ていた。感想を聞くこともできなかつた。彼女は五十円のニッケル硬貨を二枚テーブルに置いて、穴の開いたお金は珍しいわね、と言って立ち上がった。おれはお金を断る言葉も出せずに黙ってその指先を見ていた。

次に彼女が発した言葉は、意識を失って霧がかかっているおれの頭を火炎の柱のように突き抜けた。靴が汚れちゃつたわ、拭いてちょうだい。それは歓喜だった。おれはその通りにした。おれは形のいい脚の脛の白さを目に焼きつけようとした。それは素足だった。あとは何も覚えていない。それからしばらくはおれは絵が描けなかつた。

次の日、こんなところへ連れてきちゃだめだろう、とおれは邦子へ言ったが彼女は笑って、またいつかお兄ちゃんの焼きそばを食べたいと言っていたわと答えた。おれは胸が痛くなつた。

「美津子さんは京都の近くの、琵琶湖の北の方、お父さんの里を訪ねると言つて三か月ほど留守にするらしい」と言つた

時はほつとした。

「それからフランスへ帰つたら婚約者が待つているらしい」
おれは彼女に恋をしているわけではないのに苦しくなつた。見知らぬ男の胸に彼女が顔を埋めているのを想像するだけで、胸が締め付けられた。おれの想いが仮にあつたとしても届くはずはなく、叶えられるものでもない。考えるだけでばかばかしいことだった。この苦しさに耐えようとしても意味はないし、できるわけではない。このもうろうとした幻をただ早く忘れることだ。

それから二ヶ月ほど経つた時、悲劇が起こつた。邦子の様子がおかしかつた。大学との契約が終わつて淋しいのだろうと思つていた。おれの前にあまり顔を見せなかつた。ある大雨の夜、橋に立つてゐる邦子を見たという人がいてそれが彼女の姿の最後だった。欄干にはひらひらするスカーフが引つかかつていた。海に流れ込んだ濁流は、死体を遠くへ運び去つたようだった。彼女は見つからなかつた。警察も搜索を打ち切つた。おれは彼女の死の姿を見たかつた。また同時に決して見たくなかつた。おれの慟哭は止まなかつた。

遺書は簡単なものだった。

「於田先生へ」と書かれていた。「一度でいいから声をかけてもらいたかつた、あれほど頼んでも無視されるんですか、声をかけてもらえれば、あの時のことは忘れることもできるのに、お腹のことは自分で処理できるのに、一度でもいいから、お話ししたかつた、ただ声だけでも、一度でも」

彼女は妊娠していたのだ。

おれの慟哭は怒りと復讐心に変わった。彼への憎しみは冷静な殺意になった。おれは彼の日々の行動を調べ、仲間の一人を連れて大学の裏門で彼を待った。

彼を見るのは初めてだったが、すぐに分かった。がっしりした体格をしている。話しかけると瞬きもせずおれをじつと見つめた。邦子に何をしたのか、どんないきさつで、どんな気持ちで、どうして邪険に。彼は感情を抑えた風でもなく黙っていた。それはおれに許しを請う表情ではなく、ただ単なる悔悟でもなく、自分の中にある得体の知れない哀しみの衝動を抑えようとしてできない無力感のようにも見えた。

こん棒で脛を打つと彼は倒れた。そして蹲ってじつとしていた。おれは背中と腹を蹴った。何故抵抗をしないのか、許しを請わないのか。首筋と後ろ頭をこん棒で殴りつければ確実に彼を殺せる。だが俺にはできなかった。一度でも一瞬でも邦子が心を通わせた体だと思っとうおれの力は鈍った。憎しみより邦子の悲しみがおれを捉えた。

おれは何日も続けた。彼は帰る道を変えたがそれは同じことだった。彼が憔悴していくのがわかった。出会うと観念したように逃げなかった。おれの殴打に蹲ったまま耐えた。決して表情を見せようとしなかった。おれの与える苦痛が、自分の体の奥底にこびりついている苦しみを和らげるとでも言わんばかりだった。妹への贖罪だけではなく、もつと激しい罪に苛まれているというようだった。おれは何故かそれが分かった。さらに憎しみは増した。おれの殺意は消えた。どこ

まで彼を衰弱させるかが目的になった。

それがおれの日課になった。もう回数は覚えていない。毎回痛めるところを変えた。右のわき腹を蹴りつけると、次の回は左のわき腹だった。尻はこん棒で打った。腰と背中も踏みつけた。首筋にはおれの靴の泥が食い込んだ。

ある時おれは彼の唸りのような泣き声を聞いた。おれの攻撃の合間に肩がかすかに震えていた。それが痛みの苦しきでもなく、罪を悔いる悲しみでもない別の苦悩でないかと思つた時、おれはふと気が緩んだ。それはもつと激しく自分を断罪してくれともいうようだった。おれは何かわかる気がした。

おれはもう絵は描かなかつた、いや描けなかつた。酒を浴び複雑な場所に行くしかなかつた。酒は砂の味がした。淫行は空虚な無力感に浸るためだけだった。そしてさらに醜悪な生活に己を沈めて行きたかつた。朝目覚めても身体はしばらく布団から出ることが出来なかつた。胃が傷んで血が出ることもあつた。もつと大量に血を吐きたかつた。

それは秋の終わりの冷たい雨が降る夜のことだった。酒を飲みながらおれはアトリエでぼんやりスケッチブックに鉛筆をさまよわせていた。隙間風に裸電球は揺れていた。

描きたいものはなかつた。いや、はつきりとはそれはあつたが、決してできそうになかつた。描きたいものがあり、確実に掴みたいものがあるにもかかわらず、それを前にして何もできず、ただじつとしていなくてはならない、それは絶望の

深淵に沈んだままでいることだった。その苦しさから逃れるには、意識を、それを内包する肉体を抹殺する以外にない。

ドアが開いて美津子が入ってきた時、おれはそう驚かなかつた。予感はしていたのだ。おれの心は喜びより、苦しみの予兆で引き締まった。コートは濡れていた。コートを脱がせる時、濡れた髪が匂った。おれの指は彼女の肩に触れた。その一瞬をおれは忘れまいと思つた。おれは椅子を勧めた。

「邦子さんのことがとても悲しい」

彼女は涙声で言つた。おれに表情は見せなかつた。

「いつかパリの私のところへ遊びに来たいと言つていたわ」

おれは彼女の表情を見ないようにした。彼女がその涙目でおれを見たら、おれは立つてはいられなかつただろう。おれは涙が嗚咽になつて噴き出してくるのをおさえきれなかつた。

「明日出発するわ、今日は最後の夜なの」

おれは黙つて腰からタオルを抜いて、何も言わずしゃがんで美津子の靴を拭いた。泥まみれだった。決して忘れたことのなかつた美しい白い足の脛が目の前にあつた。おれには手を触れる力はなかつた。

「少し寒いわ」と聞こえたが周りにはなにもなかつた。おれは立ち上がつて安っぽい紙のようなカーテンをレールから引きちぎつて彼女の肩に掛けた。そして飲みかけのウイスキーのグラスを差し出した。口をつけると、ああおいしいと少し微笑んだが、あとは話すことはなかつた。

邦子のことはもう話したくなかつた。また美津子の肉親や生い立ちや生活など知りたいことはいくらでもあつたが、そ

れら話すことに何の意味があるう。そして多分これが最後の機会だろう。会うことはもうないだろう。

おれはやがて忘れる時に覚える解放感を予想し、あまりに張りつめた気持ちでこの時間を過ごすまいと思つて言つた。

「君を描いてみていいかな」

彼女はまた微笑んだ。瞳が光つた。その和んだ優しさにおれはひるんだ。

おれはその口を、鼻を、眼を、顔の皮膚を、表情を見つめたが、悲しくて続けられなかつた。これが最後ののだと思つと、鉛筆の力は萎えた。おれの絵は無慙なものだった。おれはそれを見せずに破つた。おれたちは長い間黙つたままつた。

何故最後の夜をこんなところで過ごそうとするのか。単に邦子への哀悼だけではないだろう。おれ自身に好意を持つているわけではないだろう。おれの秘めた暗い思いを、情けで叶えてやろうなどということもないだろう。誰も知らない彼女の苦しみが何故かここで癒されるのだろうか。

もう夜は更けていた。雨が激しくなつた。

「ここで眠つてもいいかしら」

彼女がつぶやいた。断る理由はなかつた。おれは段ボールを何枚か敷いて絵の具箱を枕にしてやつた。古い毛布があつた。それを靴も履いたまま横になつた彼女へ掛けてやつた。乱れた頭髮だけ出して、全身をくるんで彼女はすぐに眠つた。

おれはその頭髮に顔を埋めて匂いを嗅ぎ、彼女の息を吸い、次に唇を奪おうと思つた。彼女は眼を開けずに眠つたままの

ふりをするだろう。

だがおれには何もできなかつた。堪えられないほどの欲情におれは捉われて、打倒されそうだった。それでもおれは動けなかつた。そして救いを求めるような悲痛な微かな叫びがおれの胸底を貫いた次の瞬間、おれの体は臓器ごと突然破裂し、昇華され虚空にちりばめられて消えた。おれは深い虚脱感に包まれた。

彼女の呼吸が毛布の動きで感じられた。おれには体の線の全てが見えた。なめらかな稜線に包まれた、馥郁とした肉体を感じられた。清らかな泉だった。聖なる香料だった。決して触れてはならない美そのものだった。これをどうやって描けばいいのか。いやどうやって愛せばいいのか。おれにできるわけはなかつた。

美の前にただ存在するだけがおれに許されることだった。しかし美そのものはおれを拒否する。おれは愚劣の塊として存在するだけだ。このおれの無力感が悲しかった。沈痛な気持ちで堪えるしかなかった。おれは冷静で涙は枯れていた。不条理の前で沈黙するしかなかった。それしかない。それは絶望という深い悲しい安らぎでもあつた。

寒くなつたおれは美津子のコートを肩にかけようとしたが、思わず抱きしめた。彼女の匂いがした。そして毛布とその塊を見詰めたままじつとして一睡もしなかつた。

夜が明けた。雨は止んで弱々しい冬の光が射しこんだ。彼女の顔は真つ青だった。しかし満ち足りた感じがしていた。彼女は少し微笑んだだけで黙つて出て行つた。後ろは振り向

かなかつた。

しばらくして邦子の友人の一人に出会つた。美津子はパリへ帰つたということだった。於田先生は体調が悪く休みがちになつた。平井教授は出張が多く、研究室は淋しくなつた。学会の開催が心配だ、と邦子のことはもう誰も忘れていた。

光のない朝が訪れ、力のない昼が過ぎ、汚れた夜が流れていつた。もう絵は描けなかつた。痴呆状態のおれはアトリエを閉じた。あの夜のことを現実に残したくなかつた。

それは偶然だった。ある夕方、街でおれは於田先生に会つた。おれにはもう彼を攻撃する力は残つていなかった。憎しみは残つたまま、妙な親近感さえ感じられた。それは決して思いたくないことだった。思つてはいけないことだった。於田先生と美津子が少しでも心を通じ合つていたのでないか。邦子の犠牲の上で。決して愛し合つていたという言葉は使いたくない。

おれは煙草をくわえたまま薄笑いを浮かべて彼に近寄つた。これ以上ないくらいにおれは惨めに卑屈になりたかつた。そこはパチンコ屋の駐車場だった。おれの心は震え、唇も震えたが、はつきりと言つた。最後の夜、美津子はおれと過ごした、最後の想い出に、と。軍艦マーチが喧しかった。彼がおれを襲うのは分かつていた。おれが身構えるより早く彼はおれの煙草を取り上げるとおれの眼に突き刺した。おそらく指も一緒だつたのだろう。一瞬真つ赤なものが見えて激痛に頭が割れたようだった。おれは気を失いかけた。顔面への攻撃

にはもう痛みはなかった。痺れでおれは崩れ落ちた。意識はすぐになくなつた。何度も体と与えられる衝撃だけが微かな記憶に残つた。おれは死んだと思つた。

おれは三週間ほど意識を失つていた。片目は潰れていた。折れた頬骨の手術はしなかつた。於田先生が失踪した、としばらくして聞いた。おれを殺したと思つていろいろだろう。

宮本さんの話はそこまでだつた。あとは聞かないままだつた。僕は美津子という女性を知つていたような気がした。宮本さんはその女性をずっと心にしまつていたのか、忘れてしまつたのか、そしてそれからどうやって絵を再び描きだしたのかわからない。その後の苦しみや悲しみと闘いながら絵に戻つたことが、僕には大切なことに思われた。葛藤は激しいものだつたらう。ただその経過がくわしく分からなくても僕には理解できる気がした。

宮本さんの葬儀の後、近所の人たちはそれぞれ絵を持って歸つた。彼らの貧しい居間にその絵が飾られるのを想像しても寂しい気はしなかつた。道端に捨てられた一枚を見つけた時も僕はそのままにしておいた。地面から見上げる宮本さんの眼のように思われたからだつた。

二年後に合わせて集落は少しずつ壊され、再開発される計画が進められていた。三キロほど離れた国道沿いには、木造の二階建ての棟続きが連なつた朝鮮人の地区が出来るということだつた。現在地には大きなスパーと高層のアパートが

計画された。川の水は浄化され、河口には散歩道と車時代に合わせた幅広の道路が走るだろう。戦後出来た二十五年だけの仙境だつた。

その二 完

その一 山の日記 「季刊午前五十四号」のあらすじ

将来画家になる夢を碎いた父と喧嘩別れした僕は、自殺するつもりで山中を彷徨つていたが、ある工場の飯場にたどり着く。そこでいろんな人間と出会う。とくにその主任と呼ばれる男に魅かれる。彼の過去の暗い情熱の恋の話は僕の心を打つ。ある出来事で主任はそこを去り、僕も山を下りることにした。

その二 地の微熱 「海十八号」

その三 四重奏の終わり 「仮題」 「海十九号」の予定

その四 未定

先の「未成年」を解体して、大幅に書き換え別の物語にした。